

月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第104号 2023年8月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1
近畿大学教職教育部 富岡研究室
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム 戦後の宗教系私学の学生生活と教員養成のための 体制構築	雨宮 和輝	2
逸話と世評で綴る女子教育史(104) －大分県と鹿児島県的女子師範学校－	神辺 靖光	8
創立100周年を迎える大東文化大学へのメッセージ －地域と大学との関係史の受講学生らの思い－	谷本 宗生	18
大正時代の女子高等教育(59) －東京女子大学－西荻窪新校地への移転－	長本 裕子	20
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (28):『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科(2)	吉野 剛弘	25
旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(1)	富岡 勝	30
体験的文献紹介(53) －官立英語学校と公立外国語学校廃止の顛末－	神辺 靖光	34
刊行要項(2015年6月15日現在)		41
短評・文献紹介		42
会員消息		43

コラム

戦後の宗教系私学の学生生活と教員養成のための体制構築

雨宮 和輝
(早稲田大学)

今回のコラムでは、筆者の研究対象である宗教系私学について、その対象時期を、筆者が対象とする大正期ではなく、戦後の時期に焦点を当て、その学生生活と、戦後における教員養成に対しての体制構築の動き

について言及するようにしたい。

本コラムで中心とする資料は1950年代に刊行されていた。「大学生生活シリーズ」の宗教系私学のものを中心として見ていくようにしたい。『大学生生活シリーズ』は『東大生活』『早大生活』『慶大生活』といったように、各大学ごとに刊行されており、戦後における各大学では、学生はどのように生活していたのか、また、学生の就職状況などが示されているものであった。これら「大学生生活シリーズ」の中でも、宗教系私学に着目し、その学生生活や教員養成を含めた就職状況について言及したい。

はじめに「大学生生活シリーズ」では宗教系私学の発刊状況は、管見の限りでは、キリスト教系では『立教生活』『明治学院生活』『青山学院生活』、仏教系は『立正大生活』、神道系としては『国学院生活』がある。以下、本コラムではこれらの宗教系私学に着目して、まず、戦後の学生の生活がどのようなものであったのかを見たい。

まず『明治学院生活』を見ると「学生生活のあり方」の項目を見ると、その学生生活について「キリスト教の精神を基礎とする教育方針の明確さは、以て父兄の信望を担うに足るものがあり、教育の理想をかかげた学院の真面目は、学費の多少などはいささかも問題ではなかった。しかし、それはすべて戦前のことである」とされている。その上で「「アルバイト」という言葉は、今日の学生生活を語るにどうしても切り離せない大きな一つの経済的要素になっている」²として、学生とアルバイトが切り離せない関係となっていることを述べている。

これは他の宗教系私学においても同様のことのようで、『国学院生活』を見ると、「アルバイトをすると云う一つの労働過程のなかでも、学生の形成は成立してゆく」と述べた上で「歴史学を、国文学を研究する学生が、アルバイトに夏期氷塊の配達をしても、或は家庭教師をすることも決して矛盾したことはない」³と述べている。また、同書では、学生が就くアルバイトの種類についても明示しており「アルバイトの内容は、その六十%以上が肉体労働であり、トラックの上乗り、工場の材料の運搬整理、電線工事、雑役など、女子学生の場合は、派出所、保健婦代用の家事手伝いが多い」⁴とされており、男子学生のアルバイトが多岐に渡っているのに対して、女子学生のアルバイトは限定的なものとなっていることがわかる。

アルバイトの項目で言及されているが、戦後の各大学において、女子学生の入学が許可され、男女共学となっていった。こうした経緯により『大学生活シリーズ』においても女子学生についての項目が設けられており、宗教系私学の同シリーズにおいても、女子学生についての言及が見られる。その多くの女子学生自身の記録として記載されているが、それを見ていきたい。

『青山学院生活』を見ると「女子学生のすがた」という項目があり、女子学生の記録という形で示されている。そこでは「私達は男性と並べられて始めて物の見方、考え方、また事の処理の仕方などで、“私はやはり女なのだ”と感じさせられることが往々にしてある」⁵と述べられている。『立正大学生活』を見ると男女共学において一番困ることとして「例えばグループ同志男女と話合ったり遊んだりする事は何も言われぬが、一対一の場合などには思わしくないうわさを飛ばされる事がないではない」⁶とした上で、それに対して良かったことについては「女子のグループと男子のグループとを比較すると、前者は外面的なもので後者は内面的なものと云えるかと云うのは、女子同志の場合、唯話合って居る時は誰でも参加がすぐ出来るが、いざ旅行などという様な行動的なものに対してバランスがとれないからだ」⁷と述べており、男女共学になったことで、良い面も悪い面も見えるようになってきたことがわかる。

以上のように宗教系私学では、仏教系、キリスト教系問わず、戦後における男女共学という状況については大学に入学を許可された当事者である女子学生も戸惑っていたことが窺える。

では、このような状況で学生生活を過ごした学生達はその後、どのような進路をとったのか。各大学生生活シリーズでは就職に関する項目についてそれらが言及されているが、宗教系私学の進路の中で度々取り上げられている教員という就職先について、『大学生生活シリーズ』ではどのように言及されていたのかを見てみたい。

『立正大学生生活』では「文学部の中で、史学、国文学、英文学および地理学の諸学科の卒業生はなんといっても教育界に数多く進出している」と述べた上で「地理学科の教育界に占める地位については今さら言うまでもない。出身者の横の連絡も充分にとれ、全国至る所で「立正地理」出身者に会おう程である」⁸と述べられており、戦前より教育界における地理学科出身者の存在感は強かったことがわかる。また、立正大学関係者の話としては学部別にその就職状況について「仏教学部は殆ど全部が宗門の子弟なので別段この方面の心配はなく、文学部の人の多くは教育界に進出するが、これも長い間この方面に先輩の築いた堅実な地盤を持っているので全国的に求人数も相当にあり、贅沢をさえ言わなければ心配はない」と述べた上で「殊に地理・歴史学専攻の人々は既に斯界に定評のあるところ。現在でも求人は絶え間なく、需要に応じきれぬ有様である」⁹と述べられている。立正大学においては文学部の地理歴史学科を中心として教員養成の体制構築が行われていたことが窺える。

また、キリスト教系私学を見ると、明治学院は「教育職員免許状について」という項目が設けられている。当時の明治学院で取得できる免許状としては「1「英語」、「中国語」、「社会」、「宗教」；高等学校二級普通免許状、中学校一級普通免許状 2、「商業」；高等学校二級普通免許状 3：「職業」、中学校一級普通免許状」¹⁰といった免許が取れることが示されている。また、青山学院では教育学科が設けられていたこともあり、教育学科の特色として「この学科の設置その

ものが、学院の社会的使命にそう所以である」¹¹とした上で、卒業生の活動の方面として「学校教師、教育行政、官庁工場等の人事管理、ジャーナリズム等、頗る多岐に渡っている」¹²と述べられており、教育界隈への就職がその目的とされていたことがわかる。さらに、同書では、青山学院で取得できる教員免許状について、以下の表のようにまとめられている。

表1 青山学院で取得できた教員免許の種類

免許状の種類		免許が取得できる学部学科
免許教科	学校及び級別	
英語科	中学校一級普通免許状 高等学校二級普通免許状 中学校二級普通免許状 高等学校仮免許状	文学部英米文学科 文学部基督教学科 文学部教育学科 経済学部経済学科 経済学部商学科
社会科	中学校一級普通免許状 高等学校二級普通免許状 中学校二級普通免許状 高等学校仮免許状	経済学部経済学科 経済学部将学科 文学部基督教学科 文学部英米文学科 文学部教育学科
宗教科	中学校一級普通免許状 高等学校二級普通免許状 中学校二級普通免許状 高等学校仮免許状	文学部基督教学科 文学部英米文学科 文学部教育学科
国語科	中学校二級普通免許状 高等学校仮免許状	文学部英米文学科 文学部基督教学科 文学部教育学科
商業科	高等学校二級普通免許状 高等学校仮免許状	経済学部経済学科 経済学部商学科
職業科	中学校一級普通免許状 中学校二級普通免許状	経済学部経済学科 経済学部商学科
	小学校一級普通免許状	文学部教育学科
	幼稚園一級普通免許状	文学部教育学科

※『青山学院生活』より作成

表1のように、青山学院文学部教育学科においては、幅広い種類の教員免許状を取得することができるかとされている。その一方で、商業や職業については経済学部で取得できるようになっている。経済学部での特色にも「大部分の学生は実業界への進出を目指しているが、中には教員を希望しているものもあるので、次のように免許状の取得が出来るようになっていく」¹³として、多くの学科から、幅広い教員を輩出しようとする体制が構築されはじめていたことが窺える。

以上のように、戦後の宗教系私学においては、戦前までと教育機関としての性格やその体制が大きく異なり、また、学生の生活も1950年代の景気の影響もあるとは思われるが、アルバイトがその生活と直結しているような状態であった。学生の生活が勉学だけをしていけばよいのではなく、アルバイトなどを経て人間としての「形成」をしていかなければならない時代となっていくことがわかる。また、戦後の新しい大学における新しい要素として、女子学生が入学してきたことも『大学生生活シリーズ』では言及されていた。同シリーズでは、女子学生側の感想として、当時の大学の様子が示されており、それらの感想を見ると、女子学生側にとっては男子との関係性に悩んでいる部分もあったとされているが、これは、男子側にも同様の意識があったのではないかと考えられる。

さらに、当時の学生の就職先の一つとして教員という選択肢について着目した。宗教系私学の就職先を見ると、立正大学では戦前より、地理歴史に関してはその卒業生が教育界に大きな影響を及ぼしてきたとする一方で、仏教学部については「殆ど全部が宗門の子弟」であるから、就職の心配はないとされているのは、仏教系私学の戦前からの特徴であると言える。キリスト教系私学を見ると、明治学院は『大学生生活シリーズ』において教職課程の一覧を掲載し、青山学院においては教育学科を設置しており、また、幅広い教員免許を取得することができるようになっていた点からも、就職先の一つとして、教員を学生が選択できるように、体制を構築しようとしていたと見ることもできる。

これまで筆者は戦前の、特に大正期における宗教系私学の大学昇格を対象としてその教育方針・内容の変遷を分析してきたが、その時期についても、教員というのは学生の進路の一つとして教員が選択肢として示されていたことがわかったが、戦前までの大学とは異なる性格の教育機関として出発した戦後の宗教系私学では、今回取り上げたような学生の生活に関する資料を見ることでも、教員養成の体制構築、並びに教職課程の整備に努めていたと窺うことができるだろう。

注

- ¹佐々木邦編『明治学院生活』（1953年、現代思潮社）56頁。
- ²佐々木邦編『明治学院生活』（1953年、現代思潮社）57頁。
- ³丸茂重武編『國學院大學生活』（1954年、現代思潮社）97頁。
- ⁴丸茂重武編『國學院大學生活』（1954年、現代思潮社）99頁。
- ⁵気賀重弓編『青山学院生活』（1953年、現代思潮社）40頁。
- ⁶野村輝昌編『立正大学生生活』（1953年、現代思潮社）80頁。
- ⁷野村輝昌編『立正大学生生活』（1953年、現代思潮社）81頁。
- ⁸野村輝昌編『立正大学生生活』（1953年、現代思潮社）180頁。
- ⁹野村輝昌編『立正大学生生活』（1953年、現代思潮社）182頁。
- ¹⁰佐々木邦編『明治学院生活』（1953年、現代思潮社）188-189頁。
- ¹¹気賀重弓編『青山学院生活』（1953年、現代思潮社）105頁。
- ¹²気賀重弓編『青山学院生活』（1953年、現代思潮社）105頁。
- ¹³気賀重弓編『青山学院生活』（1953年、現代思潮社）106頁。

***このコラムでは読者の方からの投稿もお待ちしております。**

逸話と世評で綴る女子教育史(104)

—大分県と鹿児島県の女子師範学校—

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

九州は古代律令の頃、^{なんかいどう}南海道と呼ばれていた。北方に朝鮮半島から支那大陸があり、^{とうしょ}島嶼を伝ってその文化が受容できたし、東・瀬戸内海を通過して畿内に入り、大和朝廷と結んで文化交流もできた。西南に無数に点在する島嶼を利用すれば南シナ海方面の文化にふれることもできただろう。彼らの足は舟であった。それ故か、古来、九州の人士は一衣帯水の日本列島各地に出没し、とりわけ近世以後、権力文化の中心地・江戸東京に現れて活躍するようになった。本稿で大正期の女子師範学校の興隆を書くに当たって九州各県の中から事例として性格がかなり違う大分県と鹿児島県をあげよう。

まず明治初年、廃藩置県による幕藩体制から府県体制への変わり方が以下のように違う【表1参照】。大分県域は^{ぶんご}豊後10郡と^{ぶぜん}豊前の下毛郡、宇佐郡であるが、まず明治3年までに幕府領や各藩の^{あずか}預り地が^{ひた}日田県になり、次いで豊後の岡藩以下7藩が4年7月、一斉に県になり、11月大分県に統合された。旧豊前国一円は^{こくら}小倉県域になっていたが、9年には豊後の福岡県に合併しそのうちの^{うさ}宇佐・下毛両郡が同年8月、大分県に編入されて大分県域が確定した。

一方、南端の鹿児島県域の薩摩藩は明治2年1月、長州・土佐・肥前の藩主とともに藩主が率先して領土(版)と人民(籍)を返上(版籍奉還)したから鹿児島藩は旧藩領域をそのまま継承して薩隈2国と日向の一部と奄美諸島を直轄し、さらに^{りゅうきゅう}琉球国を属国として支配した。明治4年の廃藩置県では薩隅日3国にあった鹿児島県以下7県が廃止され、新たに鹿児島県の^{みやこのじょう}都城、^{みみつ}美々津の3県が置かれた。鹿児島県の管轄地域は旧藩領のうち薩摩一国と大隅国のうちの^{くまげ}熊本・^{ごむ}駄謀・^{おおしま}大島3郡のほか琉球国を含めて35万石であった。明治5年5月、都城から大隅国の^{あいら}始良・^{ひしかり}菱刈の両郡を割いて鹿児島県にあわせ、9月、琉球国を

分離した。異同が激しくみえるが、本来の薩摩・大隅2国、石高39万石に蟠踞した^{ばんきょ}のである。

[表1]大分県成立表

〔豊後国〕				
幕府領	日田県			
	(1.閏4.25)			
熊本藩預かり所	日田県			
	(1.8.28)			
佐伯藩預かり所	日田県			
	(3.12.24)			
松平貫一郎采地	日田県			
(杵築藩分知)	(2.12.2)			
木下俊清采地	日田県			
(日出藩分知)	(2.12.2)			
大給邵吉采地	日田県			
(府中藩分知)	(2.12.2)			
久留島平八郎采地	日田県			
(森藩分知)	(2.12.2)			
岡藩	岡 県			
	(4.7.14)			
白杵藩	白杵県			
	(4.7.14)			
杵築藩	杵築県			
	(4.7.14)			
日出藩	日出県			
	(4.7.14)			
府内藩	府内県			
	(4.7.14)			
佐伯藩	佐伯県			
	(4.7.14)			
森藩	森 県			
	(4.7.14)			
延岡藩領	日田県			
	(4.2.22)			
熊本藩領	熊本県			
	(4.7.14)			
島原藩領	島原県	日田県		
	(4.7.14)	(4.8.)		
〔豊前国〕				
島原藩領	島原県	日田県		
	(4.7.14)	(4.8.)		
中津藩	中津県			
	(4.7.14)			
宇佐宮朱印地	長崎府	日田県		
	(1.8.28)	(2.7.)		
久留米藩預かり所	日田県			
	(1.8.28)			
小笠原左門采地	日田県	巖原藩	巖原県	日田県
(時枝領)	(2.12.2)	(3.1.18)	(4.7.14)	(4.8.)
幕府領	日田県			
	(1.閏4.25)			
			小倉県	福岡県
			(4.11.14)	(9.4.18)
			大分県	
			(4.11.14)	
			大分県	
			(9.8.21)	

()内の数字は明治の年月日を示す。

藩県の沿革 (『大分県史 近代篇I』による)

両県のお国柄をみよう。16世紀・別府湾に面する現大分市あたりに大友宗麟そうりんなる大名がいた。豊前・豊後・筑前・筑後・肥前・肥後6カ国の守護大名を兼ねた武将であるが、1551年にシャビエルを招きキリスト教の布教を公許し保護してから教会やコレジオ、育児院病院などが建てられキリスト教が栄えた。府内の外港、沖の浜には天文・天正期みん・明船やポルトガル船が入港、南蛮貿易で栄えた。戦国大名であるから大友氏もしばしば合戦し、当時から戦闘に長けた薩摩の島津氏ほこと矛を合わせたが、戦闘一点張の島津氏と違って大友氏のやることは文化的・思想的・学問教育的な志向が脈打っていた。

幕藩時代になると豊後の地は小藩分立し、また幕府領や諸藩あずかり・預地しんしよくに侵食されて統一性がなくなるが、実はかえって各小藩が独自の藩校をつくり、各地の私塾、郷校、寺子屋も盛んという稀にみる教学盛んな状況が出現したのである。数多くの漢学塾から“豊後三賢”と言われた三浦梅園ほたり、帆足万里、広瀬淡窓をあげると共通の教育観が窺える。それは師が教え諭すのではなく、生徒が寄宿生活を通して修養する“君は川流を汲め我は薪を拾わん”という精神であった。

豊前中津藩士・福沢諭吉が慶應義塾を創立し、近代日本の学問・思想・教育に洋学の種を植えつけた先覚者の一人であり、かつ日本の近代学校制度に私学を位置付けた偉人であることは論を待たない。現大分県中津生れの福沢は明治5年の奇しくも「学制」公布日と同じ8月3日おおいたちに大分小校を発足させた。これを模範校として県内各地に分校をたてた。これらの学校はすべて有志者の寄金によったから、当時のコトバで言えば、郷校か義校である。大分県の場合はこれらの学校に入学したのは子どもではなく、元寺子屋師匠や元服が終った青年ばかりだったと言うから、この学校はこれからはじまる新しい小学校の教師養成、即ち師範学校の役割を果たしたのである。福沢は東京の慶應義塾の建設にいそがしかったのであろう。また当時、慶応流の英語学校を求める声が各地で興ったから東奔西走の有様であった。よって大分県での活躍はこれで終わる。

私は豊後の国の人々、大分県民が中世の終り近世のはじめ頃から遠く西欧のカトリックと結んで病院、学校などの文化、福祉、教育施設、機関をつくったり、中

国由来の教え諭す儒学から書生が共同生活の中から人間の生活を学んだり、西欧の英語を学ぶことから近代人の文明開化を身につける習慣を覚えることに着目して福沢のおおいだ大分小校を述べた。このように旧態から脱して新しさを求めるのが豊後大分県の人々である。これを主導したのは各小藩の士族であるが、数多あまたの農漁民、商人たちは反対しないのか、また小藩林立の中で争わなかったのか、その形跡は認められない。想うに小藩林立だからこそ互いに争わず、認めあったのであろう。

本稿を書くに当ってかげもとお鹿毛基生博士の『大分県の教育史』（思文閣出版）から多くの教えを受けた。数ある府県教育史の中で出色のものである。記して御礼にかえたい。

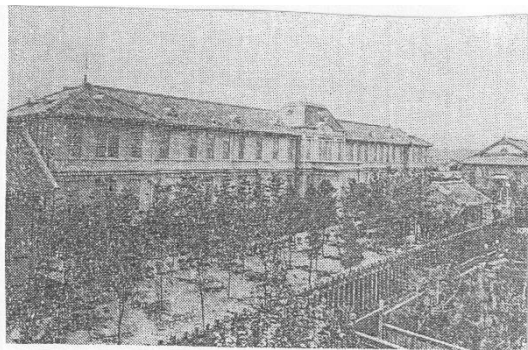
さて、鹿児島県である。当県は700年来、島津という同じ大名のもとで統治されてきた。島津氏は薩摩国を保持して守護大名から戦国大名へ、そして幕藩体制下、島津・鹿児島・薩摩の名でその権勢を奮った。明治2年、薩摩藩主が、長州・土佐・肥前藩主と並んで版籍奉還した際、鹿児島藩は旧藩領域を継承するとともに奄美諸島を直轄し、琉球国を属国とした。4年の廃藩置県では鹿児島・みやこのじょう都城・みみつ美々津の3県が置かれ、琉球は分離された。以後、県域はしばしば郡の境界変更として行われ、明治29年、南諸県郡を大隅に編入して鹿児島県域が確定した。南に伸びる島嶼面積も島嶼人口も多い特殊な県である。

封建時代、薩摩藩には侍さむらいと百姓の二階級しかなかった。侍は鹿児島城下に住む者と各郡に住む郷士ごうしに分れ、郷士は農業もするので“肥たご侍”こえと蔑さげすまれた。しかし、明治維新の改革で“肥たご侍”は県内各地の地主になり、郷土の議員、市町村長、役人、警官、教員等、県行政を動かす幹部になってゆく。城下に住む上流武士は上京して出世した者が多い。明治維新は薩長藩閥の革命的奮闘によって成就したものだし、その後も薩長藩閥政治によって文明開化が押し進められてゆく。戊辰戦争を勝利に導いた西郷隆盛と初期内政を完遂した大久保利通は明治初年の最高権力者であったし、最初の伊藤博文内閣の閣僚には鹿児島県士族が以下のように多い。大蔵大臣・松方正義、陸軍大臣・大山巖、海軍大

臣・西郷従道、文部大臣・森有礼、またこれら閣僚のもとで活躍した高級官僚に鹿児島県士族が多い。日本はその後、日清・日露の大戦争を迎える。日清戦争は中国大陸の不衛生に悩まされたただけだが、日露戦争はまさに存亡をかけた国民戦争であった。日本全国から招集された百万を超える兵士たちの総帥、総司令官大山巖^{いわお}陸軍大将、日本海海戦を勝利に導いた海軍大将東郷平八郎^{とうきょう}はともに鹿児島藩・県の士族であった。大山・東郷はじめ陸海の将帥・幹部らは若い頃藩の留学生として欧米の科学的陸海軍を学んできた気鋭の士族たちであった。よって彼らは欧米を侮^{あなど}るようなことはしない。しかし同じ士族でも郷村に住む郷士と交流が薄いから郷士や百姓たちは欧米の事情をまったく知らず、旧式の生活を営む。鹿児島県城域に居住して育つエリート士族と城外、農村に住んで庄屋・村長になる郷士たちと全く無学無筆の農民たち。概ね大正の時代を迎えるまでの鹿児島県の事情はこのようなものであったろう。

想うには小藩分立の豊前豊後・大分県は一ヶ所に集中するものがなかった。封建時代、大城郭がなく小藩が各地に陣屋をつくった。数人の武士が屯^{たむろ}して通行人を改めたりするが処罰されることはない。こうしたことが習慣となって庶民は自由に各地を移動して新知識、新技術を吸収する。教育を広め深め、国の文明文化を高める第一歩は身体と精神の自由を獲得^{かくとく}することであろう。

大分県における近代学校の開始は前に述べた福沢の大分小校で、これから興す義務教育の小学校教師を養成しようとするものである。しかし、修業期間はわずか2ヶ月である。これでは新制義務教育の小学校教師を養成することはできない。よって、明治7年、新生小学校に合わせて師範学校伝習所とし、8年には附属小学校を設置し



大分県女子師範学校（大分市長浜町）

た。ところが9年2月伝習所が火災により焼失したので10月、新校舎を設け、大分県師範学校と改称したのである。しかるに小学校令下の就学率は低く、やっと50%を超える程度であった。当県の女児は子守や家事手伝い、賃労働に従っていたからである。男子の大分中学校は早くも明治18年に発足し、中学校令の施行で県立大分尋常中学校になり、30年には杵築、臼杵、竹田の3町にその分校ができ、さらに中津尋常中学校ができたのに女学校は33年、大分町に大分県高等女学校がやっと開設する有様であった。

明治30年、師範教育令が公布され、児童就学率の上昇にともない師範学校の拡充につとめたが、女子師範学校の設置に本格的になったのは女児就学者が急増した明治40年代になってからである。即ち大分県女子師範学校を明治41年、大分市の県立大分高等女学校に併設した。そして、44年、市内長浜町に校舎を新築移転した。45

年には附属小学校もできた。【表2】に見る如く大正7年以後、志願者が急増したが、女教員の不足が慢性化したので大分県教育会附属臨時教員養成所を女子師範に附設して尋常小学校教員を養成した。女子師範の学科課程は明治40年の「師範学校規程」の通りの修身・教育・国語及漢文・歴史・地理数学・博物・物理及化学・裁縫・図画・手工・

〔表2〕 大分県の女子師範学校の入学者数

年 度	教員数		第 一 部		第 二 部	
	男	女	志願者	入学者	志願者	入学者
明治40	1	1	111	40		
41	3	2	83	30	15	15
42	6	3	79	37	—	—
43	9	3	95	38		
44	10	5	86	40	—	—
45	10	6	113	40		
大正2	9	5	105	40		
3	9	5	91	40		
4	8	5	82	40	17	34
5	7	4	93	38	—	—
6	7	4	65	39	—	—
7	8	4	160	40		
8	8	5	145	80	56	32
9	10	5	132	40	38	16
10	11	7	174	79	63	39
11	12	9	219	80	100	38
12	11	8	224	80	122	40
13	12	6	240	80	128	40
14	12	6	379	159	236	49
15	13	8	222	78	91	39
昭和2	12	6	240	80	128	40
3	19	6	198	80	100	39
4	17	7	251	76	159	40

音楽・体操。大正時代以後、他の女子師範学と同じく運動競技、故郷研究ふるさとが盛んで、また朝鮮支部方面と首都東京への修学旅行が行われた。

鹿児島県の教育をみよう。前に述べたように薩摩藩は城下に住むエリート武士層と農村ばんきよに蟠踞する郷土層と農民の三者が住み分けていたので概ね明治年間には鹿児島市街の士族の学校、郷土由来の“郷中教育”ごじゅう（武術偏重）が盛んで、農村に住む平民は殆ど無学であった。それでも市街や町に住む平民児童で小学校に通う者があったから本県の明治10年における義務就学率は23%である。これは全国平均34%に及ばず青森県に次ぐ下位2番目であった。女兒の就学率は特に低かったが、それでも明治30年頃から女兒の就学率が上昇し、34年には全体の就学率は90%を超えた。このように本県は明治前半期、小学校義務教育の就学率が極めて低かった。しかるに教員養成の師範学校は明治の始めから開設されていた。即ち明治8年、鹿児島市街の中心、東千石町の天文館跡に小学正則講習所ができて、翌9年10月に鹿児島女子師範学校と改称したのである。

「学制」に師範学校の規定はないが、第40章で「小学教員ハ男女ヲ論ゼズ年齢二十歳以上ニシテ師範学校卒業免状或ハ中学免状ヲ得シモノニ非ラサレバ其任ニ当ルコトヲ許サズ」としているし「着手之順序」で「速ニ師表学校ヲ與スヘキ事」として教員養成が急務であることを表明している。万事、新政府の命令を尊重する士族優先の鹿児島県が市街地に率先、師範学校をたてた事情うなづは頷ける。

明治中期、小学校就学率の上昇に伴って明治24年、尋常中学校が設置された（ノチ県立第一中学校と改称）。次いで30年、拾良郡加治木町に尋常中学第二分校（ノチ県立加治木中学校）が設置された。いずれも士族の子弟が就学し、平民の生徒は極めて少なかった。鹿児島の中学生は軍学校に進学する者が多く、特に鹿児島一中卒業生の海軍兵学校進学率は全国随一だという世評があったことを私は記憶している。明治34年に再興された第七高等学校造士館も特異な学校である。その淵源は17年、旧藩主島津忠義の寄付金によって創立した

もので、20年、文部省の管理下で鹿児島高等中学造士館になった。その後、島津の財政事情で一時廃校になったが、34年、第七高等学校造士館として再興した。生徒は鹿児島県の士族で帝国大学に進学した。

このように男子尊重の鹿児島県であったが明治35年になると鹿児島市加治屋町に県立第一高等女学校が、45年、姶良郡加治木町に町立加治木実科高女が設置された。恐らく士族の娘が進学したのであろう。こうした状況の中で女子師範学校だけが、明治後半期から昭和初年に至るまで比較的健全に発展したのである。

明治8年頃、鹿児島城下東千石町天文館跡に女子用の小学正則講習所ができて、翌9年、鹿児島女子師範学校と改称したが、西南戦争で一たん閉校した。11年頃から復興しはじめ13年11月には鹿児島師範学校男子教場、女子教場、20年には男子部・女子部と改称、31年には師範教育令による鹿児島師範学校になり43年、男子部と分離して鹿児島県女子師範学校になった。女子師範学校になってからの初代校長は木下竹次で、その実践的教育法は広く知られたが、女子師範をはじめると同時にできた県立第二高女を同一校舎で同一教職員の指導で営んだことが注目される。大正時代に盛んになるスポーツ競技の際も、女子師範と第二高女が一体になった。“女師二高女”の名で出場し、強いので対抗女学校からしばしば異議が出たが、“女師二高女”のスポーツ出場は止めなかった。

鹿児島県女子師範には身体を鍛えるという確固たる方針があった。その鍛錬法は“17里遠足”と言われるもので、毎年5月、本校から国分市にある八幡神社までの往復17里(66キロ)を二日ばかりで往復するものである。落伍者は途中、汽車での帰宅が許されるが、卒業までの完歩することが期待された。この長距離遠足の準備として毎年12月に行われる8時出発午後5時帰校の中距離遠足があり、さらに毎学期行われる2時間ほどの市内城山登山があった。こうして足腰を鍛えて卒業までに国分市八幡までの17里遠足を完歩する事が求められたのである。また同校には日本陸軍に憧れる、或いは憧れるように仕向けられた

風があった。寄宿舎での生活は起床から食事、就寝まで合図はすべて陸軍式のラッパの響きによった。毎年3月の陸軍記念日には校旗を先頭に全生徒が鹿児島連隊の練兵場で分列行進を行った。市民は“女子師範”をもじって“女子士官学校”と称したと言う。前に鹿児島の中学生在が海軍士官に憧れて、海軍兵学校への進学率が日本一高かったことを述べたが、鹿児島県女子師範の生徒が陸軍に憧れて戦前日本の一つの気風をつくったようにも思われる。ともあれ当県唯一の鹿児島県女子師範学校は生生発展して昭和の世を迎えた。〔表3〕にみる如く常に多くの志願者の中から選抜された優秀女子が生徒になり次代を背負う小学校児童の女教師になって活躍したのは喜ばしい。当県女教師のエリート性は〔表3〕によれば大正12年以後の第二部において著^{いちじる}しくなったと思われる。学科課程については師範学校の場合、文部省指定を^{じゅんしゅ}遵守しているから本稿ではとりたてて述べなかった。

参考文献

新福裕子『女子師範の全容』

長坂金雄『全国学校沿革史』

鹿毛基生『大分県の教育史』

豊太寛三他『大分県の歴史』

原口泉他『鹿児島県の歴史』

井原政純『郷学・小学校の設立基盤と地域社会』

篠田弘・手塚武彦『学校の歴史・5・教員養成の歴史』

[表3]鹿児島県女子師範学校入学者数

年度	教員数		第一部		第二部	
	男	女	志願者	入学者	志願者	入学者
明治43	13	4	100	40	26	11
44	17	8	101	40	19	14
45	20	3	81	40	13	7
大正 2	16	8	74	40	—	—
3	18	6	54	35	30	15
4	16	10	63	38	38	27
5	15	13	122	36	42	28
6	24	12	127	36	47	25
7	10	12	167	40	46	37
8	13	12	135	40	33	28
9	9	11	164	40	24	19
10	10	10	235	39	45	29
11	8	6	248	40	63	38
12	8	5	308	40	101	40
13	10	5	297	40	135	80
14	9	6	108	40	312	120
15	16	3	190	40	294	110
昭和 2	21	3	189	40	264	103
3	19	3	154	41	320	99
4	17	3	186	40	333	103

創立100周年を迎える大東文化大学へのメッセージ

— 地域と大学との関係史の受講学生らの思い —

たにもと おねお
谷本 宗生(大東文化大学)

本年前期東松山校舎にて、私(谷本)が担当している、地域と大学との関係史の授業(全学共通科目)において、創立100周年を迎える大東文化大学に対するエールを受講学生らが語ってくれました。あつい思いばかりで、驚きです。

そこで、興味深い受講学生らの母校への思いなどを、一部要約して、みなさんにも少しばかり紹介してみたい…と思います。

*** **

◇学生Aから:

大東文化には、今後も変わらず温かい空間であってほしいと思います。真面目過ぎてはりつめた空気のある学校でもなく、ゆるゆる過ぎて授業に集中しづらいわけでもない。しっかり学習をして、セミの声を聞く余裕もあるくらいのこの雰囲気がとても好きです。今のままの雰囲気であり続けていただければ十分です。

◇学生Bから:

授業の一般公開など、在学生だけでなく、学習意欲ある人を幅広く受け入れる生涯学習の手本となるような大学になってほしいと思う。またオンライン授業を活用することで、地域や大学の垣根をこえた授業をしてほしいと思う。学食や運動施設も開放することで、地域に開かれた大学になってほしいと思う。

◇学生Cから:

本学の広く充実した土地や空気、学生らの活気など、この安心できる空間を長く続けてほしいと思います。近くに山があり、動物もいる。ゆっくりと充実しているこの場所で、思いっきり好きなことを学び、誰かの安心する場であり、居心地のいいと思える素敵な場であり続けてほしいと思います。

◇学生Dから:

大東文化大学に通っていて、現在までとくに大きな事件もなく過せています。雰囲気もよいと感じています。だから、このまま通いやすい空気をつくり続けてほしいと思っています。101年目以降も、何ごともなく続いて行ってほしいです。

◇学生Eから:

大東ならではの特色を伸ばし、唯一無二な大学になってほしいと考える。現在でも、おそらく本学にしかない特色が多くある。たとえば、授業で野生の木や草、虫等を観察するというものや、スポーツ・健康科学部という、アスリートに特化したり、体育教師を育成したりする学科もある。このようなよい点はどんどん伸ばして行ってほしい。

◇学生Fから:

本学では、今よりもっと多様性に富んだ歴史になると期待している。本学では、アジアからの留学生が多く在籍している。また、それに合わせ、本学では、アジアの言語学習も盛んに行っているが、これからは、アジア以外からの留学生も積極的に受け入れ、人種、宗教の壁をこえたコミュニケーションがとれる環境をつくり、のびのびと自由に学ぶことができるような歴史を築いてほしいと考える。

◇学生Gから:

現在、大東文化大学はある程度の知名度はあるものの、もっと革新的な試験システムをいち早く全国でも先駆けて導入してみるなど、大学界をけん引するような存在にぜひなってほしいと願っています。そして将来的に、大東文化大学の卒業生である・・・と、胸をはっていえるようになってほしいと思います。

*** **

しっかりした考えに基づく、素晴らしい建設的な意見の数々で、正直驚きました。自身が所属する大学に対して、けっして無関心や諦めなどでなく、より持続・向上していこうとする学生らのあつい思いや問題提起は、やはり教員としてはうれしい限りです。

大正時代の女子高等教育(59)

東京女子大学—西荻窪新校地への移転

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

大正11年3月、初めての本科卒業生42名(国文学科4名・英語専攻部13名・人文学科10名・実務科第一部4名・実務科第二部11名)と、高等学部の本科生9名・選科生15名を送り出すこととなった。18日、卒業礼拝が行なわれ、25日、第1回卒業式が行われた。新渡戸学長は国際連盟事務次長の要職にあり、スイス・ジュネーブから学長祝辞「ジュネーブ湖畔より」が送られ、安井学監により代読された。長文の中からその一部を紹介しよう。

“従来我が国の教育が形式に流れやすく、知識の詰め込みに力を注ぎ、人間として、一個の女性としての教育を軽んじ、個性の発達を重んじず、婦人を狭苦しい社会の一小機関とみなす傾向がある”と前置きして、

本校に於ては基督教の精神に基いて個性を重んじ世の所謂^{いとしきもの}最小者をも神の子と見做して、知識よりも見識、学問よりも人格を尊び人材よりは人物の養成を主としたのであります。…形式に拘泥することなく、規則の如きは殆んどあるやなきやの如く、教ふる者も学ぶ者も共に神の前に於いては高きも卑しきもなき平等なる^{しもべ}僕婢の如き心を以つて師弟の間に精神的の連絡を結び学生相互の間には姉妹の愛情を以つて交り、打ち溶けて淡やかな、のんびりとした温き心地が全校に満ち満ちてゐると遙に遠方の地にありながら確く信じて居ります。(『東京女子大学100年史』)

と、新渡戸学長が開校時に目標とした方針が実践されたであろうと祝福している。さらに国際連盟の職務にあたっている経験から、“徽章に示した「犠牲と奉仕」の念がなければ百人百色の世界で業務を全うしえない。この二つの精神こそが二足の動物を人間たらしめるのだと痛感している。故に「犠牲と奉仕」は、卒業生の皆さんがどのような境遇にあろうとも全生涯を通じて守るべき主義である”と強調している。新渡戸学長のしみじみとした慈愛に満ちた祝辞は卒業生の心に浸みこみ、奮い立たせるものとなったであろう。

卒業式から半年後、大正11年9月17日の『国民新聞』は「東京女子大学を巢立ちした六十五人」という見出しで、同年3月に初めて卒業生を出した東京女子大学の学生らの名前と就職先の名称を出して詳しく紹介している。“同校の教員、地方及び東京の女学校の教員など教職関係が多いが、民間会社、電気局、婦人矯風会、東京市の教育課など職業婦人として当時としては珍しい分野にまで就職している”と紹介している。東京の女子青年会、大阪の女子青年会、婦人労働者の指導事業など社会貢献に勤しむ卒業生もいる。一方で、帝国大学の聴講生、母校の大学部に進みさらに勉学に励む者もいた。高等教育を受けた女性たちがどのような形で活躍するのか、さぞかし世間の関心が寄せられていたであろう。

大正12年4月、安井は在米委員会からの招待で渡米することになり、横浜港を出港した。創立に際して米国で協力してくれた委員会や大学などに現状報告と感謝の意を伝えるためであった。国際教育大会にも出席し、あちこちの大学や集会でスピーチをし、東京女子大学への献金を募る絶好の機会となった。さらにアメリカ最古の女子高等教育機関であるマウント・ホリヨーク大学で名誉文学博士号を受け、喜びに満ちて、4ヶ月後の8月23日に帰国した。

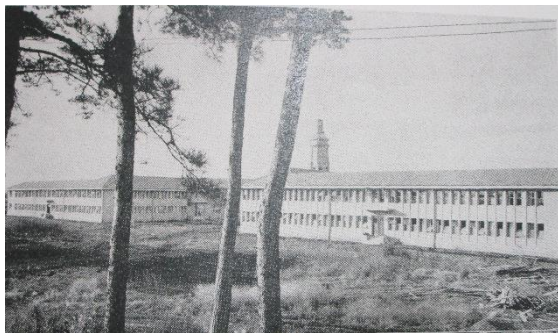
ところがその1週間後、大正12年9月1日正午前、関東大震災が起こり、折から火災が発生し、東京全市が火の海となった。東京女子大学の損害は、幸いにも角筈校舎が4千円、井荻村（現東京都杉並区善福寺）で進めていた新校舎建築が1万1千円で比較的少なくて済んだ。学生は休暇中で帰省していた者が多く、罹災者は少なかったが、職員4名、学生3名が罹災し、うち1名が死亡、1名が重症を負った。震災後学生たちはそれぞれの環境において、罹災者の救済にあたった。避難者への炊き出しに協力する者、衣服や寝具等を作製し罹災地に送る者、基督教青年女子奉仕団員となって孤児や迷子のために尽くす者等、本校のモットー「奉仕」の精神が自ずと発揮された。大学は新聞広告を出し、学校の状況を伝えたり、“10月18日より授業開始、については16日に参集すること、出校

できない場合は理由を届け出ること”等、いち早く地方へも知らせたりして、学生や保護者を安心させる手段を取った。

開校前から恒久的キャンパスについては計画されていたが、大正8年11月の理事会で豊多摩郡井荻村に2万8千余坪の土地購入を決定し、校舎の建築が進められていた。当時の井荻村はわずか13戸の小作農家が大根と小麦を栽培しているだけのひなびた所であった。当初の計画では大正12年9月までに第1期工事として寮棟、教室、体育館の建設を完成し、引っ越しが完成する予定であった。しかし、大震災により新校地の損害は少なかったものの、角筈の校舎は修理の必要が生じた。大震災後の混乱の中で日本での募金活動は難航した。アメリカからの送金に期待して進めるしかなかった。

初代学長新渡戸稲造は就任1年後の大正8年3月、後藤新平に随行して、第一次世界大戦後のヨーロッパ視察に出発し、要請されてそのまま国際連盟の事務次長として留まった。不在の約5年間、事実上安井てつが校長代理として校務を担った。大正12年12月9日、新渡戸学長から辞任の申し出があり、10月に理事会で承認され、安井が二代学長に就任した。新渡戸は名誉学長となった。同じ時期に副学長の長尾半平も辞任することとなり、安井にとっては痛手であった。

13年3月、第3回卒業式を終えて、井荻への移動準備に取り掛かり、4月5日、荷馬車50台、トラック10台で井荻村へ出発した。まだ校舎の一部と寄宿舎が建てられたばかりで、庭や垣根もなかった。6月4日、献堂式並びに新学長就任式を西校舎の講堂で挙行了。演壇の背後に日英米の三国旗が交叉して立てられた。当時西荻窪



荒野に建つ東西寮（西荻窪に移転当初）
『東京女子大学五十年史』より

の町はまだ開けておらず、駅付近に店舗が少しあるくらいで、校地までの途上は家がぼつぼつとあるだけであった。学生たち数名が停車場で来賓の案内にあたり、自動車数台で来賓を運んだ。式は長尾半平の司式により、讃美歌、祈祷、聖書朗読などに始まり、学長委嘱の辞、安井の答辞、来賓の祝辞へとすすめられた。午前の式を終えて、一同は寄宿舍食堂で食事をとり、食後は校内諸建物を参観、午後寄宿舍の社交室で、レセプションが行われた。

安井は、就任の辞で、四つの抱負を述べた。第一は、基督教主義に基づいて人格教育に重きを置くこと。第二は、学生の体育に重きを置くこと。第三は、Liberal Collegeの性質を有たせること。第四は、学究的生活と社交的生活との調和を図ること。

大正13年4月4日の『東京日日新聞』は、西荻窪上井草に新築中の東京女子大学の様子を伝えている。

新校舎は武蔵野の真只中、広茫二万八千五百坪の山林畑地を敷地とした都の塵とは全くへだたり勉強、体育には申し分のない別天地である。

以下概略すると、“ここに鉄筋コンクリート2階建の20の教場を備える校舎と寄宿舍二棟が完成した。体育館、礼拝堂、残りの校舎と寄宿舍は順次建設予定。特に目をひくのは寄宿舍で、料理場を中心として十字形的设计。長食堂は1卓10人ずつ、50人を入れることができ、部屋は1室1人主義、3畳敷で畳が2畳敷いてあり、窓より1枚分は板敷で、据え付けの机及び書棚がついている。両親の元を離れた若い学生のために6畳2人用の用意もある。”と続く。

寄宿舍は1室4人くらいが通常という時代に、1室1人主義は画期的であった。これは勉強にも休息にも他人の妨害を受けることなく、また、各自静かに黙想し、日々反省することが大切という新渡戸の考えであった。階上階下に50人ずつ収容し、教職員の室もある。社交室もあり、談話したり音楽を楽しんだり、室内競技の設備なども整える計画である。こうして仮校舎の淀橋角筈から校外の西荻窪

の恒久的校地へと移転して、第二代安井てつ学長のもと、第2期東京女子大学時代が始まっていく。

昭和2年4月、修業年限4ヶ年の国語専攻部と数学専攻部を増設し、大学部の修業年限を3ヶ年に延長した。大学部英文学及び国文学専攻、英語専攻部・国語専攻部の学生に対して、文部省よりその専攻科に対する中等教員無試験検定の認可が与えられるようになる。

創立当時の入学生は76名、創立15周年の昭和8年時点で、学生数は402名。卒業者は旧規則による卒業者が全科合計60名、新規則による卒業者は、大学部95名、高等学部328名、英語専攻部288名、国語専攻部50名、数学専攻部26名、合計847名となった。しかし、時代は刻々と戦争の足音が聞こえてくる時代へと向かっていく。安井学長の苦悩はさらに続く。

参考文献

『創立十五年回想録』

『東京女子大学五十年史』

『東京女子大学の90年』

『東京女子大学100年史』〔本編〕〔資料編〕

『新聞集録大正史』

新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書(28):

『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科(2)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、『鳥取県公報』(以下、『公報』)に掲載された専攻科の生徒募集に関する告示を検討する。

1959(昭和34)年度からの鳥取東高等学校への専攻科の設置にともない、最初の生徒募集要項が示された。その後、何度かの変更が生じているが、今号では最初の生徒募集要項と、その後の変更について見ていく。

最初の生徒募集要項は、1959(昭和34)年3月31日に示された。その内容は以下の通りである。

昭和三十四年度鳥取県立高等学校専攻科生徒募集要項

一 募集学校及び募集定員

鳥取東高等学校 専攻科

鳥取市立川町五丁目一〇番地 約五〇人

二 出願資格

- 1 高等学校の通常課程及び定時制課程を卒業した者
- 2 学校教育法施行規則第六十九条の各号の一に該当する者

三 出願手続

- 1 入学志願者は第四項に定める出願期間内に次に掲げる書類を鳥取東高等学校に提出しなければならない。
 - (イ) 入学願書(教育委員会所定の用紙による)
 - (ロ) 出身学校長の発行する調査書(大学受験用の調査書と同様とする)

又は高等学校の卒業資格及び学力を認定するに足る書類

- 2 鳥取東高等学校長は、前号の願書を受理したときは志願者に受験証を交付するものとする。
- 3 入学願書は鳥取東高等学校から交付を受けるものとする。

四 出願期間

- 1 昭和三十四年四月六日(月)から四月十日(金)までとし毎日午前九時から午後五時までとする。
- 2 郵送の出願書類は四月十日の消印のあるものに限り有効とする。

五 入学の選考及び許可者の発表

- 1 入学選考の期日は昭和三十四年四月十二日とする。
- 2 入学選考は、学校長が出願者の提出書類を審査して合否を決定する。
但し入学志願者が入学定員を超過する場合には、選考試験を実施することがある。
- 3 選考試験を行う場合は次の要領による。

(イ) 期日 昭和三十四年四月十二日午前九時三十分より

(ロ) 場所 鳥取東高等学校

(ハ) 試験科目 国語、数学、英語

- 4 入学許可者の発表は昭和三十四年四月十四日とし、学校に掲示するほか、許可者あて通知するものとする。

六 出願等に関する質疑

募集及び出願に関する質疑については、鳥取東高等学校あて照会すること。

七 参考事項

- 1 専攻科の授業は、精深な程度において特別の事項を教授し、研究を指導することを主目標として実施するものであり実施教科目は次の五教科目とする。

国語、数学、外国語、理科、社会

- 2 専攻科の修業年限は一ヶ年とし学期は前期（四月～九月）、後期（十月～三月）までの二期とする。
- 3 専攻科生徒の身分扱い（学生割引等の措置を含む。）及び学習評価、単位認定並びに修了等の措置については、高等学校の通常課程の取扱に準ずるものとする。
- 4 専攻科の授業料は次のとおりとする。
 - （イ）授業料の年額は一万円とする。
 - （ロ）前号の授業料は次の区分により分納しなければならない。

区分	納付額	納付期限	摘要
第一期	四千元	四月十日まで	第一期分の納付時期は本年度に限り四月三十日までとする。
第二期	三千元	七月十日まで	
第三期	三千元	十月十日まで	

- 5 専攻科生徒の入学選考手数料は徴収しない。
- 6 専攻科生徒に対しては学区制は適用しないものとする。

1960（昭和 35）年度から 1961（昭和 36）年度にかけては、増設された学校が「一 募集学校及び募集定員」に増やされた。1961（昭和 36）年度からは表形式になっている。

また、1960（昭和 35）年度の募集要項からは、授業料も 2 期制となり、「七参考事項」の4が以下のように変更された。

- 4 専攻科の授業料は次のとおりとする。
 - （イ）授業料の年額は一万円とする。

(ロ) 前号の授業料は次の区分により分納しなければならない。

区分	納付額	納付期限	
第一期分	五千円	四月三十日	ただし、納付期限以後に入学、転学又は復学した者については、その事実が生じた日の属する月の末日とする。
第二期分	五千円	九月十日	

1961(昭和36)年度の募集要項からは、「七 参考事項」の5と6がなくなった。さらには、受験料として書類に収入証紙の貼付が求められるようになり、「三 出願手続」の1が以下のように変更された。

1 入学志願者は、第四項に定める出願期間内に次に掲げる書類を各募集高等学校に提出しなければならない。

イ 志願者は、入学志願書(用紙は、県教育委員会所定のもの)に必要な事項を記入の上、入学選抜手数料として三百円分の鳥取県収入証紙(消印をしてはならない。)をはり提出しなければならない。

ロ 出身高等学校長の発行する調査書(大学受験用の調査書と同様とする。)又は高等学校の卒業資格及び学力を認定するに足る書類

1962(昭和37)年度からは、前期の授業料が7000円、後期が6000円となった。さらには、入学にあたって学力検査を行うことが前提とされ、「五 入学の選考及び許可者の発表」が以下のように変更された。

1 入学選考は、出願者の提出書類と入学選抜学力検査の結果を総合して合否

を決定する。

2 入学選抜学力検査は次のとおりとする。

イ 期日 昭和三十七年四月十二日(木)午前九時三十分から午後二時まで

ロ 場所 受検者の希望する高等学校

ハ 試験科目 国語、数学、英語

1964(昭和 39)年度からは、授業料の記載がなくなった。加わったものとして、「六 出願等に関する質疑」に「2 郵送の場合において、返信を必要とするものは、十円切手をはり、あて先を明記した返信用封筒を同封すること。」が新設され、「八 注意事項」として「提出された書類及び入学選抜手数料は、返さない。」と新たに規定された。また、必要な収入証紙が350円に変更された。これらに加えて若干の表現の変更も行われている。ただし、1963(昭和38)年度の生徒募集要項を未見のため、1963(昭和38)年度から変わっている可能性は残る。

1965(昭和40)年度にはこれらの変更点をふまえて、要項の形式が固まってくる。次号では、1965(昭和40)年度の生徒募集要項の内容を検討していくことにする。

(付記)本研究は科学研究費補助金(20K02435)の助成を受けたものである。

旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(1)

とみおか まさる
富岡 勝(近畿大学)

はじめに

戦後初期の松本深志高校の自治の歴史についての執筆を担当した井上義和・加藤善子編『深志の自治 地方公立伝統校の危機と挑戦』(信濃毎日新聞社、2023年)が今年6月完成し、共著者の皆さんのおかげでユニークな本になったようで少しホッとしていたころ、本ニュースレター同人でもある加藤さんから、旧制灘中学校を調査している科研に誘っていただいた。現在、多数の東大入学者を排出していることで全国的に有名になっている灘中学・高等学校の校舎に入って史料を閲覧するのも貴重な機会かもしれないと思い、参加することにした。

この科研費研究のテーマは、「近代都市における中等教育利用に関する基礎的研究—実業層の学校利用を中心に—」で、キーワードは、「近代日本 / 中等教育利用 / 阪神間 / 実業層 / 私立中学校 / 実業層の学校利用 / 京阪神地域」。研究開始時の概要は次のようなものである。

科研費のWebサイトより <https://kaken.nii.ac.jp/ja/grant/KAKENHI-PROJECT-19K02558/>

本研究は、近代日本における学校を介した社会移動の研究で、東京ではない都市である神戸を対象にしている。これまでの研究では、地方小規模都市から東京への移動について研究が進んできたが、都市から東京への移動は少なく、都市内部での学校利用については明らかではない。そこで、神戸の特徴である、酒造産業と私立中学校の関連を明らかにしながら、近代都市における中等教育利用を明らかにしたいと考えた。

都市における学校利用については、『文部省年報』や『神戸市統計書』などから全体像を知ることが可能である。神戸第一中学校や私立灘中学校の

史資料や、灘中学校の設立にかかわった白鶴酒造や山邑酒造の史料を分析していく。

つまり、神戸という都市での学校利用について分析するために、酒造産業がかかわって1928年に魚崎町（現在の神戸市東灘区）に開校した私立灘中学校を中心に研究していくというものである。

今年度に入ってから、研究対象を広げ、灘中学を中心にしながらも、同じく酒造業の辰馬家（「白鹿」を醸造）がかかわって1920年に発足した財団法人辰馬学院甲陽中学校（前身の私立甲陽中学は伊賀駒吉郎によって1917年に創立）や、平生釵三郎などの関西の実業家によって1919年に本山村岡本（現在の神戸市東灘区岡本）に設立された甲南中学校（1923年には尋常科4年、高等科3年の七年制・甲南高等学校が設立）も対象に加えることになった。

灘中学校の創立

灘中学校創立に関して、『灘中学校・灘高等学校80年のあゆみ』（2007年）を主な手がかりにして概略を述べておきたい。

大正期に神戸・阪神間の地域は住宅地として急成長を遂げ、中学への進学希望者が急増した中、地域の人々の熱望に応え、1927年に酒造家の本嘉納家（「菊正宗」を醸造）・白嘉納家（「白鶴」を醸造）・山邑家（「櫻正宗」を醸造）の資金提供による財団法人灘育英会と同財団による灘中学校の設立が認可された。

設立の発起人は曾我豊吉（御影師範学校教諭附属小学校主事などを歴任。灘中学設立後は監事・教諭になる）と、日高驥三郎（灘育英会設立後は常務理事になる）が発起人。

地域出身の衆議院議員山邑太三郎などととも中学校設立運動を進め、本嘉納家・白嘉納家・山邑家の資金提供を受けた。初代理事長は嘉納治兵衛。

嘉納家の分家筋にあたる嘉納治五郎（高等師範学校校長などを歴任）が顧問となり、嘉納治五郎の推薦で、初代校長には眞田範衛（高等師範学校出身、京都府立第一高等女学校教諭、京都府立亀岡高等女学校校長などを歴任）が就任した。灘中学校が、嘉納治五郎が関係した中学校であることは、実は広く知られていたようであるが、私は不勉強だった。

灘中学校の教育目標をめぐる複数の要素

共同研究全体のなかでは、酒造資本の教育戦略の分析、進学先や入学者の分析、灘中学校・甲陽中学校・甲南中学校などのカリキュラムなどを含めて灘中学の教育を明らかにしていくことになるが、私自身は、灘中学校教育がどのようなことを目指していたか、生徒たちはどのような学びや活動を行っていたかといった実態面を、校友会雑誌などを活用しながら少しでも明らかにしたいと思っている。もし可能であれば、灘中学校の生徒の自治活動の特色についても分かればと期待している。

まだ予想の段階であるが、灘中学校の具体的な教育目標をめぐる、以下のような複数の要素が存在していたのではないかと推測している。

第1に顧問の嘉納治五郎の影響力である。治五郎が柔道などで唱えていた「精力善用」「自他共栄」は、灘中学校の校是となっている。また、柔道が正科に採用されている。

第2に初代校長眞田範衛の教育方針である。『初代校長 眞田範衛の生涯と遺稿』（灘中学校・灘高等学校、1997年）に眞田関係の史料を収録されているが、「入試に関する報告書」（1928年）、「教員組織に関する件」と題された詳細な文書が眞田の手でまとめられている。眞田は、唱歌・童謡の作詞作曲として著名であるとともに著書『小学校に於ける理化児童実験法』（東京宝文館、1919年）もある。嘉納治五郎のスローガンを校是にしながらも、眞田校長独自の教育観や見識があったのではないかとわたしは予想している。

第3に、設立運動の発起人であり、現在の教頭にあたる「幹事」教員をつとめた曾我豊吉の教育観である。曾我が御影師範学校附属小学校主事をしていたころの教育が灘中学校に影響を及ぼしている可能性があるかもしれない。

第4は、酒造業者の影響である。何のための中教育か、どのような人材を期待したのか、などの点で灘中学校の教育への影響の有無を確認する必要があると思われる。

これらの要素が、どのような形で灘中学校の教育目標に現われているのか、(あるいは、ほとんど現われていないのか)、教育目標と生徒の活動との関係はどのようなものであったか、などを具体的な史料を使って分析していきたい。

まだ着手したばかり

まだこの研究に着手したばかりだが、今年度中に少しでもアウトプットをしようと、加藤さんと連名で11月の関西教育学会大会発表にエントリーしている。また、残された研究期間は2024年度末までの約1年半しかない。なかなか厳しいスケジュールだが、このニューズレターも利用しながら少しでも面白い研究をしていきたいと考えている。

体験的文献紹介(53)

— 官立英語学校と公立外国語学校廃止の顛末 —

かんべ やすみつ

神辺 靖光 (ニューズレター同人)

前回、明治初期最大の実力政治家・大久保利通が複雑に細分化された府県を統廃合して地方行政体制をつくり、西南戦争に勝利して一時期を画したことを述べた。その際、大久保は以後10年を民間事業と民衆教育の勃興期と予定した。私はこの大久保の時期区分に引かれるものがあり、私の明治教育史研究も10年を境に明治初期と10年代とに区切ってみようと考えた。当時、私は国士舘大学文学部教授で「明治初期における中等教育の研究」で学位を取得したばかりの時である。私の学位請求論文は明治3年の「大学規則」「中小学規則」にはじまり、5年の「学制」、6年の「学制二編」、12年の「教育令」、13年の「改正教育令」、14年の「じゅうとくがんみ中学校教則大綱」を熟読玩味してその実例を東京の官立公立学校や私塾じよじょうに例をとったものである。如上の論文は他にないから自負じふしているが、明治初期を明治14年の「じゅうとくがんみ中学校教則大綱」の公布を以って終わらせて明治10年を境に諸事変化したことを強調しなかったことにじくじ忸怩たるものを感じていた。よってこれを機会に、わが中学校史研究を見直し、明治10年を画期にしてみようと考えた。すぐに想い浮かんだのが官立英語学校の顛末てんまつである。明治6年の「学制二編追加」に外国語学校として始まり、すぐに英語学校に変更、10年に消滅した。格好の問題である。

鎖国から開港という大転回を背負った幕府や西南雄藩はすぐに欧米列強に留学生を送り、多くの西洋人教師を雇った。先見の明ある賢人が多かったことに驚く。東京の新政府の要人にも進んで欧米文化を受け入れ、新しい洋学校に欧米人の教師を雇おうとする者もあった。私立の洋学塾の中にも西洋人教師を雇うものがあつたが、当時の日本人には西洋人教師の善し悪しを見抜く力がなく港町に放浪する不良西洋人を雇って失敗した例話も多い。しかし一刻も早く欧米先進国の教師を雇ってその科学技術を学ばなければならぬとする決意は新政

府の幹部にみなぎっていた。そこで「学制」が公布された直後に「外国教師ニテ教授スル中学教則」を文部省が制定した。そして翌6年4月の「学制ニ編追加」に新しく専門学校と外国語学校が登場したのである。西洋先進国の科学技術を研究し学習するのは本来、大学であり、大学に進学する予備教育をするのが中学である。しかし緊迫した世界情勢の中で悠長なことは言っていられないから科学技術は新設の専門学校、その準備教育は外国語学校でやろうというのが「学制ニ編追加」の趣旨である。当時は後の「中学校教則大綱」にみられる外国語を一教科としてみる考え方がなかった。文部省は東京の第一大学区第一番中学を開成学校（専門学校）にしたのを皮切りに愛知、広島、新潟、宮城の4ヶ所に外国語学校を設置し、さらに大阪の開明学校、長崎の広運学校を外国語学校にした。明治7年における官立外国語学校の状況は〔表1〕の通りである。

〔表1〕

官立外国語学校名	校長名	吏員数	外人 教師数	邦人 教師数	生徒数
東京外国語学校	肥田 昭作	17	10	17	423
愛知外国語学校	吉川 泰二郎	2	2	12	119
大阪外国語学校	奥山 政教	11	5	10	205
広島外国語学校	吉村 寅太郎	8	2	3	130
長崎外国語学校	渡部 温	11	3	7	63
新潟外国語学校	三穂 健道	3	1	5	26
宮城外国語学校	伴 正順(9月まで) 下斗米 清三	6	1	3	75

明治7年・官立外国語学校年報(文部省第二年報所収)によって作成。

当時、文部省の高官も外国語学校の校長も教員も意気込みは高潮しているが欧米の中学校の実情を知らないから出来得ないことを考えた。一つの教科目を英独仏三ヶ国語で実施しようとした。実施はおろか、学級編成、教室配置すらできなかつたし、第一、ドイツ語、フランス語の教師がいなかつた。そこで三ヶ国語でなく、實在の英米人教師でやるために英語学校に直そうということになり、明治7年12月、愛知、大阪、広島、長崎、新潟、宮城の6校を官立英語学校に変え、東京外国語学校だけは旧外務省諸学所の独露清語科に仏語科を加えて外国語学校として別置した。こうして官立英語学校体制ができたのである。

[表2] 明治8年における官立英語学校の等級と学科例

東京英語学校	上下2等、各3年6級
語学	読方及綴字 文法 習字 算術 数学
地理	歴史 理学 科学 交際学 画学 唱歌
体操	フランス語
(明治8年・東京英語学校年報——文部省第3年報1のP561～564による)	
広島英語学校	4年8級
綴字	読方 会話 書取 習字 文法 作文 修辭
算術	代数 幾何 三角法 地理 歴史 博物学
物理学	経済学 翻訳 画学 体操 唱歌(当分欠ク)
(明治8年・広島英語学校年報——文部省第3年報1のP576による)	
宮城英語学校	上下2等、各3年6級
暗誦	読方 習字 綴字 翻訳 書取 文典 会話
作文	詞格 各種語論 算術 代数 幾何 罫画
地理	歴史 性理学 経済学 推古学 物理学
博物学	健康論 化学 唱歌 体操
(明治8年・宮城英語学校年報——文部省第3年報1のP581～582による)	

官立英語学校は英米人の教師(英語に堪能な日本人助教もいた)によって中学校程度の授業が行われる。[表2]にみるように綴字、読方、会話、書取(英語学習の初歩)等の学習と地理・歴史・博物学・物理学・経済学等の授業が同一の英米人教師によって行われたのである。無理があつたと思われる。生徒は恐らく在地士族の息子たちであつたらう。本来ならば藩校の句読生として国語漢文の読解をみっちり仕込まれる年齢であるのに、それをとばして英語学習が強制さ

れたのである。当時最高のエリートとして大学・専門学校に進学させようとする官立英語学校の学力がこれでよいのか。果たして官立英語学校の当事者の中からこの学校の偏頗さ、不当さを訴える声があがった。即ち明治9年、官立大阪英語学校校長・高良二は、わが校の生徒は「^{へんぱ}国語を解せざる者多く、「英語学校ハ中学ノ名アリテ其实ナク」実用にたたないと自らの学校のレーゾンデートルを否定したのである。明治10年2月、文部省は東京、大阪を除く愛知・広島・長崎・新潟・宮城の官立学校を廃止した。それらの施設はみなその土地の県立中学校に移管された。

官立英語学校が突然、廃止になった理由について、西南戦争勃発のための経費削減と説明する教育史書がある。時期が重なるからだろうが、そのようなことはない。本稿が指摘したように英語だけですべての中学教科を教えることに不信を持ったからである。以後、英語学習は中学の一教科として授業し学習するように研究され、「中学校教則大綱」の英語科に結実するのである。

日本の中学卒業生がおぼろげながらも全員英語の読み書きができるようになったことは大きな力であった。これで日本は半世紀で西洋の社会と流通できるようになった。英語について流入したドイツ語、フランス語は高等学校（旧制）の第2語学として有為な青年に学ばれた。明治後半から大正期にかけて医学界・哲学界でドイツの影響を受けたものは多かつたし、芸術や風俗でフランスの影響は強かつた。こうして明るくかつ陰影のある大正文化が生まれた。こうして封建日本は一世紀もたたぬうちに西欧の近代諸国に伍してともに歩むようになったのである。そのきっかけは日本の中等社会を形成する中学生全員に英語学習を強いた明治初期の英語学校とそれに続く「中学校教則大綱」であったと思う。

以上の研究は早稲田大学大学院での指導教授・尾形裕康先生が主宰したアジア文化総合研究所の機関誌『アジア文化』に投稿した。1982（昭和57）年の『アジア文化第7号』に「明治初期における官立英語学校顛末」として記載されている。

明治初年の日本は「学制」が公布される頃まで幕末の状況を引きずっていた

から旧時の漢学塾と並んで新進の洋学塾が都市には散在していた。それが明治初年の公立外国語学校になるのである。当時の公立外国語学校を探索すると〔表3〕〔表4〕のようである。

〔表3〕 明治初期・公立外国語学校一覧表 ……は中学校

学校名	所在地	明治7年	8年	9年	10年	11年
山形英語学校	山形県山形					
修文館	神奈川県横浜					
新潟学校	新潟県新潟					
英学校	石川県金沢					
外国語学校	愛知県名古屋					
独乙学校	京都府京都					
英学校	京都府京都					
仏学校	京都府京都					
英女学校	京都府京都					
英語学校	福岡県福岡					
洋学校	白川県熊本					
広取英語学校	熊本県 <small>託摩郡 本山村</small>					

『文部省第2年報』～『文部省第6年報』所収の「外国語学校表」

〔表4〕 公立外国語学校生徒数

明治	7年	8年	9年	10年	11年
山形英語学校			10		
横浜修文館	76	78			
新潟学校	273	123		95	64
金沢英学校	83	50			
京都独乙学校	43		120	115	123
京都英学校	62	121	82	75	86
京都仏学校	39				
福岡英語学校		85女1			
熊本洋学校	68	111	111		
広取英語学校					56

『文部省第2年報』～『文部省第6年報』所収の「外国語学校表」によって作成。

まず横浜の修文館から述べる
と旧幕府が神奈川奉行所に開設した英学所を明治元年、神奈川県が再興したものを起源とする。その後、曲折があるが明治5年、「学制」が公布された頃、横浜では市民共立の洋学校をつくる気運が興り、市民・高島嘉右衛門自営の市学校（通称高島学校）寄贈や三井八郎衛門らによる4,000円の寄附があつて、6年3月、市中共立修文館が開校した。以後、修文館は「月費三百五十円ハ賦金ヲ用ヒ其他ハ生徒ノ謝金ヲ以テ」経営された（内閣文庫・神奈川県史料）。明治7年以後の「外国語学校表」にこれが公立学校とされた所以である。

金沢の英学校の起源は旧金沢藩の洋学校に遡る。金沢藩は幕末から洋学の摂取に急となり、鈎深館（航海・測量・数学稽古所）、致遠館（英語、洋算）、七尾語学所等をつくつたが、明治3年、これ

らを統合して中学東校と称し、4年には中学西校(国漢学)と合併して金沢中学校を設立した。そして英国人教師を雇ってこれを洋学化しようとした。しかるに文部省は「公学私学ノ別ナク公費ヲ以テ生徒ニ給与」するは相ならずとして学資2万石を差し押さえた(内閣文庫・石川県史料、「石川県学務沿革略記」石川県立図書館)。その後、混乱が続いたが、やがて民費によって中学を維持するようになり英人エドワード・ラムベルトを民費で雇い英学校になった。明治7年8年の「外国語学校表」に公立学校として登記されている。

京都府は維新後、最も早く中学校・外国語学校を計画し実施した。即ち明治3年10月、プロシヤ人ドルフ・レーマンを雇って仏・英・蘭・独の語学と数学の授業を開始した。河原町二条下ル角倉代官邸跡を教場としたので角倉洋学校と呼ばれた。次いで府は4年3月、米人ボードウィンと契約、河原町夷川下ル高田別院に英語学校を開設。さらに5年1月には仏人デューリーと契約して知恩院華頂宮旧邸内に仏学校を開設した。これらはすべて京都府中学校に包含されるものであった。明治5年11月、京都府中学校も官費支給を閉ざされたので府は中学校を廃して、これを小学取締所とした。だが外国語学校3校は廃止せず継続した。6年7月、府は下立売新町の元守護職屋敷跡に校舎を新築して小学校取締所に外国語3教場を移した。「外国語学校表」に見える京都府の公立独乙学校・英学校・仏学校はこれである。新潟学校については本稿シリーズで前に述べた。熊本洋学校と広取英語学校については不審なことが多く述べるのができない。

明治初期にできた公立外国語学校は独自の背景を持つ都市に生まれ営まれた洋学塾で、明治7年から公立外国語学校と見做されたものである。ゆえに政策や文部省の規則によって開設された官立英語学校よりも個性があり、地域の特性があった。けれども中等教育のすべての学科を英独仏の三ヶ国語で教えるという方針はでき得ないことであった。それが学校当事者が認めるようになって明治10年を境に公立外国語学校は自ら転身をおこなう。金沢英語学校は中学師範啓明学校に、新潟学校は専門学校百工化学に転身した。京都の独乙学校

は予科医学校に分派した。総じて公立外国語学校は在地の高等専門教育への転化を試み、地域における進学体系創出に努力した。

本稿は多賀秋五郎博士の古稀記念論文集発行のために求められたものである。本論文は昭和58(1983)年5月発行の『アジアの教育と社会』に記載されている。

官立英語学校と公立外国語学校は幕末維新时期に簇生した洋学塾・洋学校の余映で、近代中学校形成の一階梯、特に進学体系の構築を意識した^{こころ}試みであった。

参考文献

『文部省年報』所収の「東京開成学校沿革」「大阪外国語学校沿革」「東京外国語学校沿革」、各官立英語学校の年報

沼田次郎『幕末洋学史』

桜井役『日本英語教育史稿』

内閣文庫の神奈川県史料・石川県史料・京都府史料・新潟県史

『京一中洛北高校百年史』等々

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』
刊行要項 (2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

短評・文献紹介

7月下旬、東京新聞をふと読んでいましたら、私自身の現住地である、東京都多摩市の注目すべき動きが掲載されていました。市立の全17の小学校でのプール授業を、市内の近隣にある・校外の屋内温水プール施設で、予定どおりすべて行うことができ、子どもや教員らの満足度もかなり高かったと報道されています。従来の学校にある屋外プールだと、紫外線などによる熱中症被害の懸念もあり、また天気の状態によっては、授業計画の実施変更もときに心配しなければなりませんでしたが、そのリスクを回避できる点が大きいいいます。さらに、先生自身はプールサイドから、子どもの安全確認に全体的に気を配りながら、実際の水泳の技術指導を、専門の施設指導員に任せることができ、子どもら各自の上達度を教育評価的にチェックすることもできる利点があると思います。さらに、子どもらの水泳技術も自ずと向上しているそうで、とても素晴らしい・試みだと感じます。(谷本)

8月30日付けて出版された齊藤幸平・松本卓也編『コモンの「自治」論』(集英社、2023年)を読み始めた。

『コモンの「自治」論』

<https://www.shueisha.co.jp/books/items/contents.html?isbn=978-4-08-737001-0>

この本は、「コモン」(共有財・公共財)が解体されつつある危機の時代である現代において、「自治」の実践を通して、「自治」の力を磨き、「コモン」のあり方を外部に開きつつ、平等な関係をつくれるようにしていくことを提起している

私は「自治」というと、課外活動など学校内の学生・生徒を意識してしまうことが多い。しかしこの本では、大学における「自治」(白井聡執筆「第1章 大学における「自治」の危機」)だけでなく、小さい店での「自治」(松村圭一郎執筆「第2章 資本主義で「自治」は可能か?」)、地域での暮らしにかかわる「自治」(岸本聡子執筆「第3章 <コモン>と<ケア>のミニシパリズムへ」)、食と農の「自治」(藤原辰史執筆「第6章 食と農から始まる「自治」)など、様々な場面での「自治」の取り組みについて考察されている。

このような広い視野で「自治」を考えながら、様々な場での「自治」をゆるやかに繋いでいくことがきたら、特定の場での「自治」の実践が、構成員のみの閉鎖的な権利にとどまらず、少しずつ開かれた実践になっていく可能性があるのではないかと感じた。後日機会をつくって、この本をもう少し詳しく紹介してみたい。(富岡)

会員消息

7月中旬、実母の49日を経ての納骨のため、郷里下関に一時帰省していました。兄と残された親の遺産等の扱いについて、口頭ながら、次男である私の意向（長男である兄が全遺産を相続する）などを確認し終えて、また週初めに担当授業もあるため、新山口駅（旧小郡駅）から新幹線で直ぐに東京に戻る予定でした。しかし、朝からの山口地域の大雨のために、急きょ新幹線が5時間にわたりストップしてしまいました。新山口駅の構内で、肉うどんやお握りを食べたりして、また新幹線が再開するまでの時間を過ごしました。正直、異例ながらも、自身の忍耐力を養うよい体験となりました。なお、ここ暫くの山口地域の大雨災害については、日本赤十字社などが災害支援募金の窓口を設け、たとえばNTTドコモなども、dポイントによる被災地支援寄附が携帯スマホから手軽に行うことができる（手数料0円）としています。みなさんの幾ばくかの善意が、たとえ金額的に少しかつても、被災地域の復興に少なからず寄与できればなによりであろうと思います。（谷本）

旧制高等学校記念館の第27回夏期教育セミナーに参加いたしました。一年に一回、松本に行くことが本当に楽しみです。今年もたいへん充実した会でした。（山本剛）

夏期教育セミナーに向かっている途中で、入院中の父の容態が悪くなり亡くなりました。享年88歳でした。夏期教育セミナーに参加できなかったことが大変残念ですが、同時に、皆さんに私の役割をフォローしていただいたことが、大変有り難く、得難いことだと実感しています。皆さん、本当に有難うございました。（富岡）

本ニューズレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面印刷」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。